

楽しい夏休みになるはずだった。

京都府内の高校に通う女子高生A・Mは、
乳頭の鋭い痛みと異様な湿度で目を覚ました。
辺りは薄暗く、カビのニオイが充満している。

ああ……

低く鈍い唸りを上げるモーター音とともに

あ……♡

部屋全体が緩やかに上下動をしているようだった。
汗の塵が束になって頬を伝う。

自慢の黒髪はすっかり体に張り付いていた。

「こっちはどっつ……それに私……なんでこんな格好をっ」

Mの両腕は頭上で交差させられ、鎖の付いたベルトで固定されていた。

さらにネイビー・ブルーの水着は引き裂かれ、ヒップが両の乳頭を貫いている。



両のピアスにはワイヤーが括りつけられ、
別々の方向へ強く引っ張られていた。

「そんなに強く引っ張らないでえっ……！」
Mは羞恥と恐怖で顔を紅潮させていった。

ああ……

あ……♡

そして右の乳房には点滴の針が刺されている。
Mは乳頭の先に微かな疼きと仄かな熱を感じた。
今までに見たこともない乳白色の雫が乳頭から滲み出る。
「えっ………なにっ？」

どろりやらの右の乳房に刺さっている点滴は、
乳汁の分泌を促進させる薬品のようだった。



白濁した汁は、ピアスに吊るされたガラスの小瓶にこぼれ落ちていく。
汁が量を増して流れ出ると、Mはある種の興奮を覚えた。
「キモチ……イイッ！ おっぱい強く引っ張られて……
ミルクが流れ出てるだけなのに……私……？」

ああ……

あ……♡

楽しい夏休みになるはずだった。
夏休みを利用した学校の友人との海水浴。
Mは磯で友人とはぐれたところを、その様子を監視していた
X国の工作人員によって拉致されてしまったのだ。

他にも同年代の友人が四人ほどいたが、その中ではMが最も
乳房の発育が際立っていた。拉致された理由はそれだった。



X国は工作船の船倉に若い女性を監禁し、
人工的に母乳を分泌させる実験を行なっていた。
「いやっ……こんなの……おうちに帰りたいよおっ……
でもっ……おっはい……おっはいキモチイイッ！」

ああ……

あ……♡

ガラスの小瓶がMの母乳で満たされていく。
そこへ白衣の男達が数名、Mのいる船倉へ入ってきた。
男達は時折Mの方へ視線を向けつつ消え入るような声で
会話をしていたが、Mにはわからない言語だった。

するとそのうちの一人がMに近づいてきて、

乳頭に吊るされたミルクたっぶりの小瓶を外した。



男は小瓶に蓋をすると、クーラーボックスへ大切そうにしまい込んだ。
搾り取られたMのミルクは実験にでも使われるのだろうか？
それとも国の幹部や要人などに飲まれるのだろうか？
そして再び空の小瓶が定位置にセットされる。

ああ……

「私……私……これからどうなっちゃうの？」

ああ……♡

浜辺では行方不明になったMを友人が
探し回っていたが、Mの声は彼女らには届かなかつた。
赤い波間に揺られながら、工作船のシルエットが消えていく。
空には星々が輝き始めていた。

Mの肉体が恐怖よりも悦びを感じていくように、
彼女はまた気づいていない……。





ああ...

ああ...



ああ...

ああ...



ああ...

ああ...♡




ああ...

ああ...♡



ああ...

ああ...♡



乳房への陵辱が一段落すると、続いて両手首を拘束されたままのMは診察台の上に寝かされた。男達はMの足首にもベルトを巻きつけると、そこから頑丈そうなチエーンを繋ぎ、壁に取り付けられたリールでゆっくりと巻き取っていった。

鈍い金属音と共に否応なくMの両脚が開かれていく。

「いやっ…いやあっ！脚…

そんなに…開かないっ！」

Mは脚が目一杯開かされた状態で体をくねらせた。

その度にネイビーの水着が

股間のスリットに食い込んでいく。

Mの肢体の自由は完全に奪われてしまった。

すると一人の男がMの股間へ無造作に手を伸ばした。抵抗する間もなく股間の薄衣がめくられると、彼女の秘部が露わになる。スリットの上の丘には控えめに生えた陰毛がキレイに整えられていた。

搾乳で性的興奮を覚えた

ばかりのスリットからはピンク色の粘膜がだらしなくはみ出し、若い雌の強烈な芳香を立ち上らせていた。そして雌穴が粘度の高いコタシをしたたらせる様子を、

男達の好奇の眼差しが包围する。

「だめっ…見ないでえ…恥ずかしい…」



Mの反応を見て男は不敵な笑みを浮かべると、おもむろにスポンジのファスナーを下ろし自らのペニスを取り出してみせた。


「ちよっ…やっ…なに…なんなの…いやだっ…」

激しく動揺したMは自分の顔が紅潮するのがわかった。勃起した男性器を見るのは生まれて初めてだったからだ。男は弓なりに反ったペニスを握ると前後にシゴキ始めた。

「…なに…してるの…？」

次第に男の息遣いは激しさを帯び、バンバンに膨れたペニスの先は紫色に変色していった。





それは突然だった。ペニスの先から真っ白な液体が放たれると、猛然とMの体に襲いかかってきたのだ。「やだっ…おしっこ…私の体にかけてないでえっ…!」Mがその液体を尿と勘違いしたのは無理もない。何せ勃起した男性器すら生まれて初めて見たのだから。

しかし次の刹那、Mは悟った。

(もしかして…………せーし?)

クラスや部活動で友人が時折セクシユアルな会話をした際、男性経験に乏しいMはいつも適当な相手を打ちつつその場をやり過ごすしかなかったのだ。

(これが…精子っていうやつ?男の人のおちんちんから…あんな風に出るんだ…)

男性の自慰行為の一部始終を目撃した上、精液を
体にかけられるという異常な体験をしてしまったM。
(精子…臭くて…キモイイ…それなのに私ったら…)
仄かに湧き上がる性的興奮が先ほどまでの恐怖を緩め、
異常な状況をMに少しずつ受け入れさせていった…。

ふとMはあることに気づいた。
薄暗くてよくは見えないが
たった今Mに射精した男とは
別に、診察台に寝かされたMの
周囲を十人程度の全裸の男達が
包囲しているようなのだ。

(なに?…なにが…始まるの?)
男達の荒い息遣いがMの聴覚を刺激すると、
彼女の心拍数はみるみる上昇していった。



















Mは突如、顔の右側から気配を察知した。と同時に
口元に棒状の温かいものが押し付けられてきたのだ。
「いあっ……あがあっ…………あふあああっ？」
なにが起こったのかもわからぬまま強烈な臭気が
鼻孔の奥を突き、熱と脈動が唇を通して伝わってくる。



Mがようやくやくそれをへーンスと認識した時には
既におびただしい精液が彼女の舌上を舞っていた。
問答無用で放出された精液が口内に流れ込んでくる。
初めて味わう精液の味は不快そのものだった。
(いんげんえっ……にがあっ……)



間髪入れずにMの左側から別の男がへニスが突き出してきた。もう待ちきれないという様子で男はMの左腕をがっちり掴むと、彼女の口元にへニスを執拗に押し付ける。「んじやつー……いにやにやあつー」



抵抗する間もなく大量の精液が
Mの胸へまぎ散らされた。
粘質の液体は湯気と臭気を放ち
乳房の表面を滑り落ちていく。
喉を塞いだ精液が彼女の叫びを封じ込めた。
(アツイイー！…精子…アツイよおおっ！)

さらに別の男がMの股間めがけて突進してきた。
男はさすがに股間の薄衣をめくると、彼女の雌穴を
ロック・オンしたまま猛然とペニスをシゴく。

(ひいいい…精子…おまんこに
またぶっかけられちゃうー！)
女性器と乳房から湧き上がる
未知の疼きと、恐怖と緊張を
与えられ続けたことがMの理性を狂わせ、
また雌の本能を開花させつつあった。



一方、乳汁を分泌させる薬がまだ効いているのか
Mの乳房は未だ膨張し続けていた。それに伴い
ビキニ水着が内側からゆっくり引き裂かれていく。

Mは乳腺のアツイ疼きを感じた。
乳房の先端からは、あれだけ
分泌してもう出ないと思われた
母乳が再び滲み出てくる。

（おっぱい……おっぱいミルク……出ちゃう……
母乳溢れて……止まんないいいいい〜っ！）



ついにMの乳頭からミルク色の飛沫が上がった。
それと同時に絶頂に達した正面の男のペニスから
若い肉体へ向けて精液の一斉射撃が開始される。

次々と浴びせかけられる精液が
Mの体をみるみる汚していくと、
彼女は未知の興奮を覚えた。

「んはあぁっ……んぶっうっ……
んおっ……おお……あ……うんっ♡
んあぁあぁあぁあぁあぁあぁっ♡」



体中が痙攣し血液が沸騰するようにアツイ。
男たちの汗の臭いや精液の苦味、粘膜に伝わる熱…
それらはもはやMにとって心地の良いものであった。

Mはこれが「イク」という感覚
なのだと思つた。事実、彼女は
ペニスの挿入も無いまま絶頂を
迎えていたのだ…。
彼女の雌の本能はさらなる快楽を
求めるべく、静かに胎動を始めていた。





































